

集団文脈と個人内過程が自己カテゴリー化に及ぼす影響

磯部智加衣

広島大学大学院生物圏科学研究科

The effect of group context and individuals' internal processes on self-categorization

Chikae ISOBE

Graduate School of Biosphere Sciences, Hiroshima University

要 旨

内集団を高揚させるような優れた内集団成員が他の成員から拒否されるのはどのようなときであり、逆に、その成員が賞賛され、受け入れられやすくなるのはどのようなときなのであろうか。本論文では、優れた内集団成員に関するこのような問いに答えることを通し、自己カテゴリー化理論（Turner, 1987）を見直すことを目的とした。

自己をどのように捉えるのかに関わる研究では、主に、自己を個人的アイデンティティと社会的アイデンティティとに区別し、議論を展開してきた。ここで、個人的アイデンティティとは、個人が独特で他の全ての人間とは違っているものとしての自己概念であり、個人間の相互作用に影響するとされている。一方、社会的アイデンティティは、自己を他の内集団成員と交換可能であるものとしての自己概念であり、集団間の相互作用に影響するとされている。そして、自己を社会的アイデンティティで捉えることが集団行動にどのようにして影響するかについて、自己評価維持動機に注目して説明を行ったのが社会的アイデンティティ理論（Tajfel & Turner, 1979）である。この理論では、自己を社会的アイデンティティで捉えている時には、内集団と外集団の比較を通して内集団を肯定的に評価しようという動機づけが働く、そのために、人は他の集団との肯定的な区別を可能にする集団間・集団内行動に従事すると説明されている。この理論を発展させた自己カテゴリー化理論（Turner, 1987）では、そのような内集団を肯定的に評価しようという動機づけに基づく認知・行動がなされるためには、個人が社会的アイデンティティで自己を捉えることが必要であり、それを導くのは「状況における集団（カテゴリー）の顕現化である」と述べている。

しかしながら、近年このような考え方が批判的に見直され、自己評価を肯定的に評価したいという動機づけが根本にあるのであれば、自己をどのように捉え評価するのかは、必ずしも状況にのみ依存するわけではないという主張が散見されるようになってきた（e.g., 遠藤, 1999）。また、個人が個人的アイデンティティと社会的アイデンティティを共に維持・高揚することを目指し、自己と環境に対して能動的に働きかけている可能性が示されつつある（Spears, 2001）。

本論文では、このような批判をふまえ、自己カテゴリー化の過程について、個人の動機づけという

側面から検討した。具体的には、集団間比較の方向といった集団文脈と、個人が内集団をどのように捉えているのか、また個人的アイデンティティがどのような状態にあるのかといった個人内過程と自己カテゴリー化過程に及ぼす影響について検討した。

加えて、本論文は、優れた内集団成員に関わる現象の解明も目的とするため、集団内の成員間関係について検討することを通し、自己カテゴリー化過程を見直した。集団内の成員間関係を説明するものとして自己評価維持モデル (Tesser, 1988) が知られている。この理論によると、その過程には以下の2つが存在するという。一つは、比較過程であり、比較の対象と自己を比べるというものである。もう一つは、反映過程であり、比較対象の成果を自己のものとして捉えるというものである。

自己カテゴリー化理論を考慮し、このような個人間比較の過程を集団という観点で捉えると、内集団成員との比較の際に、個人的アイデンティティが優勢である場合には比較過程が、社会的アイデンティティが優勢である場合には反映過程が生じやすいといえる。そこで、本論文では、集団内での個人間比較の際に、これらのうちどちらの過程が示されたかを自己カテゴリー化の指標とし、上述した自己カテゴリー化過程へのアプローチを行った。

第1章. 問題の所在

本章では、自己カテゴリー化過程に関わる諸理論・研究をレビューすることによって、自己カテゴリー化理論で説明された自己カテゴリー化の規定因を個人の自己評価への動機づけという側面から精緻化する必要性を示した。自己カテゴリー化過程を規定するものとして「集団文脈」とそれを個人がどのように捉えるのか・個人的アイデンティティがどのような状態にあるのかといった「個人内要因」に着目することが重要であると考えた。また、カテゴリー化過程の検討において、集団内での個人間比較で示される効果を自己カテゴリー化の指標とする意義について述べた。最後に、本研究の基本仮説を述べた。

第2章. 集団間文脈が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響

本章では、集団間文脈の違いが個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのどちらの自己評価維持への関心を高めるかを決定することを検討した。個人の自己評価への動機づけを考慮すれば、自己カテゴリー化理論の主張とは異なり、外集団よりも劣っている「集団間上方比較状況」と内集団が外集団よりも優れている「集団間下方比較状況」とでは、その顕現化による効果は異なることが予想される (e.g., Brewer & Weber, 1994)。

これらの仮説を検討するため、まず、研究1では、社会人を対象に、会社を内集団とした想定法による調査を行った。次に、研究2では、女子大学生を対象に学科を内集団とした準実験を行った。研究2においては、集団間上方比較状況が、集団内の個人間比較に及ぼす効果性に注目し、特性自尊心をさらなる要因として加えて検討を行った。

これらの結果をとおして、集団間文脈の顕現化は、その内容によってどちらの自己評価への維持・高揚に関心を高めるかを決定し、結果として自己カテゴリー化に影響を及ぼすことが示唆された。

第3章. 集団間文脈と個人の内的要因が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響

本章では、知覚された集団間関係の変動可能性の知覚が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響について

て検討した。Blanton, Christie, & Dye (2002) の知見に基づけば、そのような変動可能性に気がつけば、集団間文脈において社会的アイデンティティへの関心が高まるが、変動可能性を低く見積もる場合には、集団間文脈においても個人的アイデンティティへの関心が高まると予想される。

この仮説を検討するため、研究3では、集団間比較の方向と日頃の内集団評価の高さの交互作用が、集団内での個人間比較に及ぼす影響について、大学生を対象に性別を内集団カテゴリーとした実験を行った。内集団を高く評価している人が集団間下方比較におかれた場合には集団間関係に慢心を感じやすく、また内集団を低く評価している人が集団間上方比較におかれた場合にはそれにあきらめを感じやすいと考えられる。一方、内集団を高く評価している人が集団間上方比較におかれた場合、また内集団を低く評価している人が集団間下方比較におかれた場合には人は集団間変動可能性を高く見積もりやすいと考えられる。

研究4では、特性的な集団間関係の変動可能性の知覚が集団内での個人間比較に及ぼす影響について、大学生を対象に、性別を内集団とする想定法による調査を行った。

以上の研究により仮説は支持され、集団間文脈の顕現化に加え、個人がどのように集団間文脈を判断するかにかかわる個人の内的要因が、集団間関係の変動可能性の知覚への影響を介して、自己カテゴリー化過程に影響を及ぼすことが示唆された。

第4章. 個人的アイデンティティを維持高揚しようとする動機づけが自己カテゴリー化に及ぼす影響

本章では、より個人的な自己の側面が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響を検討した。Mussweiler, Gabriel, & Bodenhausen (2000) に基づき、集団内での個人間比較による個人的アイデンティティへの脅威を低減するという動機づけによって、その比較対象とは共有しない別のカテゴリーに自己をカテゴリー化すると予想した。

この仮説を検証するため、研究5では、研究2と同じ準実験において、性別を別のカテゴリー共有度として操作した。さらに研究6では、上記で示された傾向が、特性自尊心により異なるかどうかを、性別を集団間比較、理系-文系カテゴリーを別のカテゴリー共有度の操作に用い、大学生に対して実験を行った。

これらの検討を通し、人は個人としての自己評価維持に向けた動機づけによって、能動的に自己をカテゴリー化する可能性が示された。特に、研究5では、状況によってある社会的アイデンティティへの関心が高められていた時でもなお、それとは別のカテゴリーでも自らを捉えることによって、個人としての脅威を低減している可能性が示された。このことより、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティは相反するものではなく、それらを同時に維持・高揚しようとするメカニズムが自己カテゴリー化過程に存在する可能性も示唆された。

第5章. 総括と展望

本章ではまず、自己カテゴリー化の規定因の精緻化のために行った一連の研究の結果を総括し、個人が複合的に自己評価を維持・高揚しようとする動機づけの観点から考察を行った。また、自己の捉え方といったより特性的な要因、集団特性に注目することの必要性をあげた。そのような検討によって、複合的に自己評価を維持するという動機づけが自己カテゴリー化過程に影響しているメカニズムをさらに明確にするという今後の課題と展望について言及した。最後に、上記にあげた理論的貢献だけでなく実践的な貢献についても考察を行った。

引用文献

- Blanton, H., Christie, C., & Dye, M. (2002). Social identity versus reference frame comparisons. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 253-267.
- Brewer, M. B. & Weber, L. G. (1994). Self-evaluation effects of interpersonal versus intergroup social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 268-273.
- 遠藤由美 (1999). 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, **39**, 150-167.
- Mussweiler, T., Gabriel, S., & Bodenhausen, G. V. (2000). Shifting social identities as a strategy for deflecting threatening social comparisons. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 398-409.
- Spears, R (2001). The interaction between the individual and the collective self: Self-categorization in context. In C. Sedikides & M. B. Brewer (Eds.), *Individual self, relational self, collective self* (Pp. 171-198). Philadelphia: Psychological Press.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979). An integrative theory. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (Pp. 33-47). Monterey: Books/Cole.
- Tesser, A. (1988). Towards a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 20, Pp. 181-227). New York: Academic Press.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Blackwell. (欄千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 (訳) (1995). 社会集団の再発見 誠心書房.)